

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530941

研究課題名(和文) プロジェクト型カリキュラム開発過程における教師の能力形成に関する比較教育史的研究

研究課題名(英文) A Comparative-Educational History of the Teachers' Growth through the Project-based Curriculum Development Process

研究代表者

橋本 美保 (Hashimoto, Miho)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：60222212

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究においては、近代日本の教師がプロジェクト型カリキュラムの開発や実践に関わった契機や能力形成のプロセスを米国の教師と比較し、日本の教師のカリキュラム・デザイン能力形成過程の歴史的特質を考察した。本研究では、米国に起こったプロジェクト型カリキュラムの理論的背景とその実践的特質を把握した上で、それらを受容した日本における開発実態を明らかにした。両者を比較した結果、日本では教師の教育内容編成に関する裁量が制限されがちであり、その能力開発を支援する環境の整備が遅かったこと、日本の教師は制度の枠外で実践的能力を開発する意識が強く、各々の実践哲学の形成を自己研修の形で行っていたことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study aims at clarifying the historical characteristics of the modern Japanese teachers' growing process of curriculum designing, by comparing their experiences of developing project-based curriculum in elementary schools with those of American teachers of the same period. At first, the study saw the theoretical background and the practical characters of the project-based curriculum which arose in the States, and then investigated on how such kind of curriculum was introduced and was developed in Japan. After the comparison between the efforts done in both countries, some interesting Japanese tendencies were found; first, Japanese teachers had less freedom to design the educational contents at their discretion and therefore had little chance to develop their curriculum designing abilities after long. And secondly, Japanese teachers tended to make professional development efforts outside of their official work, rather personally.

研究分野：教育史・カリキュラム

キーワード：プロジェクト 進歩主義教育 新教育 カリキュラム

1. 研究開始当初の背景

日本の教師は授業研究や教授法など教育方法の研究には熱心であるが、カリキュラム開発への関心が低いとよく言われる。平成20年に改訂された学習指導要領の「総則」には、「生きる力」の育成を引き続き「教育課程編成のねらいとする」ことが明記されている。現在、この学習指導要領にそって行われている教育改革においては、「生きる力」を育成するために、教師が自らカリキュラムをデザインし運用する能力をつけることを教師に求めている。長い間、国が決めた教育内容を疑うことなく忠実に伝達してきた教師たちは今、カリキュラムを創り出すことを求められている。

しかし、日本の教師たちは、つねに教授法のみを工夫し、教育内容の改革にまったくかわらなかつた、というわけではない。歴史的には日本の教師たちの中には、国家が定めた教育内容(ナショナル・カリキュラム)の枠を越えたカリキュラム開発に取り組み、実践してきた人たちがいた。特に、プロジェクト型カリキュラムについては、「新教育」と呼ばれる運動の中で繰り返しそのカリキュラムが試行され、その有効性が訴えられてきた。教授に熱心な教師が、「うまく教えよう、よく理解させよう」とすればするほど、「どのような教材を用いればよいのか、どのような順番で教えればよいのか」と、教材開発にかかわる関心は深まっていき、やがて教科書の単元とはちがう単元を作り出す教師が現れたからである。そうした単元が、現在も注目されているプロジェクト型カリキュラムの単元である。そして、2010年現在、「探究型学習」を促進させる学習形態として、プロジェクト型カリキュラムが注目されている。歴史的に繰り返し試みられたプロジェクト型カリキュラムの導入が、今また推奨されているのである。

日本へのプロジェクト型カリキュラムの導入に関しての歴史的な研究は、従来ほとんど行われてこなかつた。しかし、申請者はプロジェクト型カリキュラムの単元は、1920年ごろ日本に「プロジェクト・メソッド」として紹介され、全国的に流行したことを明らかにした(遠座/橋本 2009)。このとき日本に紹介された「プロジェクト・メソッド」は、アメリカの教育学者キルパトリック(Kilpatrick, William H.)をふくめ、さまざまな論者によって提唱されたものである。そうしたプロジェクト・メソッドの事例は、日本に導入されるとともに改良され、多くの学校で導入された。たとえば、人形の家作り、街作り、お店屋さんごっこ、電車遊び、飲み水作り、園芸、旅行、演劇、運動会、職業体験など、現在「総合的学習の時間」に盛んに行われるプロジェクト活動の原型は、すでにこの時期の日本に導入されたものである。近年、遠座知恵(2010)によって、当時の教

育界におけるプロジェクト・メソッドの受容過程が明らかにされ、その受容がキルパトリックの学習理論に対する本格的な研究や理解によるものではなく、アメリカのさまざまな研究者による評論や方法の翻訳・紹介にとどまっていたことが指摘された。しかし、当時の欧米の学習理論が日本ではどのように理解されたのか、なぜ実践レベルでの普及しなかつたのか、についてはほとんど解明されていない。

2. 研究の目的

本研究においては、日本の教師がプロジェクト型カリキュラムの開発や実践に関わった契機や、能力形成のプロセスを米国の教師と比較し、近代日本の教師のカリキュラム・デザイン能力と、その形成過程の特質を明らかにすることを目的とする。そのために、まず米国に起こったプロジェクト型カリキュラムの理論的背景とその実践的特質を把握し、日本にもたらされたプロジェクト型カリキュラムや実践の情報が、当時の日本の教師たちに伝わった経路や内容を解明する。その上で、日本の教師がどのような研究態勢や開発条件のもとでプロジェクト型カリキュラムを実践してきたのかを米国の場合と比較する。

3. 研究の方法

本研究においては以下の手順によって比較教育史的な分析を行う。

- (1) 19世紀にヨーロッパで起こったプロジェクトがアメリカの新教育運動に影響を与え、手工や農業、産業科のカリキュラムとして成立していった過程とそこで生み出された教授理論および実践の特質を明らかにする。
- (2) 上記で明らかにしたカリキュラム理論や教授理論が、20世紀初頭の日本の教育現場にあった教師たちにどのような情報として伝わり、理解されたのか、またどのような態勢の下で研究されて具現化していったのかを明らかにする。
- (3) 大正新教育期における優れた教師、優れたカリキュラム実践の事例を取り上げ、それぞれの事例のカリキュラム開発の実態、能力形成の契機やプロセスを明らかにする。同時に米国における進歩主義教育の実践家や実践校といわれる事例について同様の調査を行い、日本と米国の新教育実践の比較を通して日本の教師のカリキュラム・デザイン能力、およびその形成過程の特徴を分析する。

4. 研究成果

日本とアメリカにおけるプロジェクト型カリキュラムの開発の実態とその普及に関する以下の資料（先行研究および第一次史料）を調査・収集し、両国においてプロジェクト型カリキュラムの理論と実践が導入され、普及していくプロセスを明らかにした。

(1) アメリカに起ったプロジェクト型カリキュラムの理論とその開発過程に関する先行研究、および開発に関わった教師の実践に関する以下の史料

デューイ（John Dewey）が提唱した「プロジェクト」の理論を実験した、シカゴ大学教育学部の実験学校（デューイ・スクール）におけるプロジェクト型カリキュラムの開発実態

コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジの実験学校スペイヤー・スクールにおけるボンサー（Frederick G. Bonser）による産業科プロジェクトの開発とその実践

コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジの実験学校ホレースマン・スクールにおけるキルパトリック（William H. Kilpatrick）によるプロジェクト・メソッドを理論的根拠としたカリキュラム開発とその実践

コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジの実験学校リンカーン・スクールの教師たちによる作業単元の開発とその実践

(2) 日本に流入したアメリカのプロジェクト型カリキュラム理論に基づくカリキュラム開発過程に関する以下の史料

大正期における師範学校附属小学校園におけるプロジェクト型カリキュラム開発の実態と中心的役割を果たした教師の思想と実践

- ・東京女子高等師範学校附属小学校および幼稚園（北澤種一など）
- ・奈良女子高等師範学校附属小学校および幼稚園（木下竹二など）
- ・明石女子師範学校附属小学校および幼稚園（及川平治など）

昭和初期におけるプロジェクト型カリキュラム開発の実態と中心的役割を果たした教師の思想と実践

- ・池袋児童の村小学校（志垣寛など）
- ・東京市富士小学校（奈良靖規など）
- ・成城小学校（島田正蔵など）

(3) 上記(1)(2)で得られた調査結果に基づいて、大正期におけるカリキュラム論の受容と実践的特質について考察した。

大正期には、新教育と呼ばれる児童中心主義教育の実現のために合科学習やプロジェクト・メソッド、生活单元など従来の

教材単元を再編する経験単元が創出されていたが、それらは米国のプロジェクト理論だけではなく、ヨーロッパの発生心理学に基づくカリキュラム理論から少なからず影響を受けていた。さらに、日本がモデルにしたアメリカのプロジェクト・メソッドもまたヨーロッパの発生心理学に基づく教育論を核として形成されていたことを明らかにした。

日米両国では、ほぼ同時にヨーロッパの新教育をモデルとしたプロジェクト型カリキュラムの開発を行っていたが、実践現場の教師からみた最大の相違点は、海外情報を受容する際の研究態勢にあった。アメリカでは早くから教師のカリキュラム開発能力の向上を支援する制度的な条件が整備されており、特に教師の実践課題に対する問題解決的な研究の機会や環境が与えられていた。一方、日本の場合は、歴史的に教師の教育内容編成に関する裁量が制限されがちであり、その能力開発を支援する環境が整備されるのが遅かった。しかし、日本の教師達は制度の枠外で実践的能力を開発する意識が強く、その実践哲学の形成をそれぞれの教員生活の場において自己研修の形で行う場合が多いことを明らかにした。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 6 件)

永井優美・橋本美保・近藤めぐみ「樋口長市の生活教育論 生命思想の影響に着目して」『東京学芸大学紀要総合教育科学系』第 66 集、2015 年、67-78 頁。
<http://hdl.handle.net/2309/137792>

橋本美保「八大教育主張の教育史的意義」『東京学芸大学紀要総合教育科学系』第 66 集、2015 年、55-66 頁。
<http://hdl.handle.net/2309/137791>

橋本美保「教員養成における教育的思考」『近代教育フォーラム』教育思想史学会紀要、第 23 号、2014 年、129-143 頁。

遠座知恵・橋本美保「大正新教育の実践に与えたドクロリー教育法の影響 「興味を中心」理論の受容を中心に」『近代教育フォーラム』教育思想史学会紀要、査読有、第 23 号、2014 年、297-309 頁。

橋本美保「明石女子師範学校附属小学校におけるドクロリー教育法の受容 及川平治によるドクロリー理解とカリキュラム開発」『カリキュラム研究』日本カリキュラム学会、査読有、第 23 号、2014 年、1-13

頁。

橋本美保「及川平治のプロジェクト理解と明石女子師範学校附属学校園におけるその実践」『東京学芸大学紀要総合教育科学系』第64集、2013年、95-108頁。
<http://hdl.handle.net/2309/132589>

〔学会発表〕(計 4件)

橋本美保「八大教育主張講演会の教育史的意義」教育史学会第58回大会(於日本大学)、2014年10月4-5日。

橋本美保「西口槌太郎によるドクロリー教育法の受容 大正新教育期の教師に与えたドクロリー教育思想の影響」日本カリキュラム学会第25回大会(於関西大学)、2014年6月28-29日。

橋本美保「教員養成における「教育思想史」の使命とは(シンポジウム「教員養成と教育思想史」)教育思想史学会第23回大会(於慶應義塾大学)、2013年9月14-15日。

橋本美保「明石女子師範学校附属小学校におけるドクロリー教育法の受容 日本の新教育に与えた影響をめぐって」日本カリキュラム学会第23回大会(於中部大学)、2012年7月7-8日。

〔図書〕(計 0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

橋本 美保 (Hashimoto Miho)
東京学芸大学 教育学部 教授
研究者番号: 60222212

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし